

二つのアフリカと

イスラム

モーリタニアの事例から



宮治 一雄

はじめに

アフリカというと、北アフリカとサハラ以南のアフリカに二分して論ずるのがふつうである。北アフリカ諸国とは、ナイル川流域のエジプト・スーダン、マグレブ諸国と呼ばれるアルジェリア・モロッコ・チュニジア、その中間にあるリビアの6カ国からなっている。これらの国々では住民の大多数がアラビア語を話し、ムスリム(イスラム教徒)であるために、アラブ・アフリカと呼ばれることもある。それに対してサハラ以南のアフリカ(ブラック・アフリカ)では、住民の大多数が黒人系(ネグロイド)で、キリスト教徒ないし異教徒(一神教徒以外)であるとされる。

二つのアフリカを区別することにはむしろそれ相当の根拠があるが、それがどういう場合に妥当なものか、常に問い直す必要がある。他の機会にも述べたことであるが^{*1}、二つのアフリカの間には明らかに第3のアフリカ、つまりサーヘル諸国(広義のスーダン地方)が存在しているのである。筆者はマグレブ研究者であり、サハラ以南のアフリカについては乏しい知見しかないが、1990年5月にモーリタニアを訪問した際、ブラック・アフリカの現実の一端に触れる思いをした。同国の経済情勢についてはすでに報告を発表しているが^{*2}、

本稿ではモーリタニアの事例を中心として、二つのアフリカに関連する問題点、とくにアフリカ大陸におけるイスラムの問題について考えてみたい。

*1 宮治一雄「アフロ・アラブ関係——アフリカにおけるアラブ問題——」(星昭編『アフリカと国際関係』晃洋書房 1980年)。

*2 宮治一雄「モーリタニア：砂漠のなかの構造調整政策」(『現代の中東』第10号 1991年3月)。

1 イスラム化とアラビア語化

上で二つのアフリカを区別した際に、その基準としたのは言語と宗教であるが、両者の間には密接な関連がある。とくにイスラムの場合、コーランは神の啓示であり、信仰表白(シュハダー)をはじめとして、礼拝の言葉はすべてアラビア語で唱えなければならない。したがってイスラム化の過程に並行して、多かれ少なかれアラビア語化の過程が進行するのが常である。

上記の6カ国は、いずれもアラビア語が国語であり、アラブ諸国の地域機構、アラブ連盟の構成国である。モーリタニア、ソマリア、ジブチもアラブ連盟に加盟しているが、アラビア語の地位を

写真：サウジアラビア資金で建立された大モスク

みるとモーリタニアでは国語であるが、ソマリアとジブチではソマリア語(クシュ語)のほうが優勢である。

アラビア語の地位について注意しなければならないのは、正則語と日常語の差異についてである。正則語とは文章語のほか、改まった演説やニュースの朗読に用いられるものであり、アラブ諸国に共通したコーランの言葉でもある。ところが日常語は地方ごとにそれぞれ独自の語彙や表現をもっており、アラビア語を母語としている人でも慣れないと他の国に行くと会話の内容を完全には理解できない。

モーリタニアのアラビア語はハサニーヤと呼ばれる方言であり、それを話す住民がモール人と呼ばれる。人口比で約70%を超え、政治・経済の実権を握っている。他のマグレブ諸国と同様に、先住民はベルベル人(サンハージャ系)であるが東アラブからの移住民との混血とアラブ化が進んだ。ヌアクショットで感じたことだが、ラジオから聞こえてくるアラビア語はニュースでもかなり聞き取りづらいし、モスクの塔から聞こえてくるアザーン(礼拝の呼びかけ)の朗唱の仕方もうまいとはいえない。アルジェリアやモロッコの南部以上にアラビア語については辺境にあることが痛感された。

それに対して黒人系は30%以下で全体ではマイノリティであるが、セネガル川に近い南部地方ではマジョリティを占め、トゥクルール、ソニンケ(サラコレ)、ウォロフなどの言語グループに分かれている。それぞれに独自の文化を守っていて、中央政府がアラビア語を強制しようすると、それに対する抵抗運動が起こされる。モーリタニアはフランスの旧植民地であり、いまなお行政とビジネスではフランス語がひろく用いられている。マジョリティがアラビア語化を推進しようすると、マイノリティがそれに反発して、フランス語を擁

護しようとするのは、アルジェリアのカビリー人にも共通する対応として興味深い。

モーリタニアはスーダンと同様に、言語と宗教の基準からみると、明らかにアラブ・アフリカに属するが、ブラック・アフリカ各地でイスラム化の進展はめざましいものがある。ムスリム人口の比率をみると、ニジェール、セネガル、ガンビア、ギニア、マリ、チャド、シオラレオネなどでは全人口の50%を超え、エチオピア、タンザニア、ギニアビサウ、ナイジェリアなどでは30%、リベリア、ブルキナファソ、コートジボワールでは20%を超えている。国全体ではムスリムがマイノリティの国でも、特定の地方(おおむね北部)ではマジョリティであり、スーダンやモーリタニアとは対照的にムスリム住民が中央政府に対抗しながら、地方分権を要求したり、イスラムに結びついた法や慣習の順守を主張している。

アフリカ諸国の独立後、イスラムの布教は他の宗教以上に活発に行なわれており、既成の宗教地図が大きく塗り替えられつつある。ムスリム人口の比率からみると、二つのアフリカの境界そのものが大きく南方に移動している。あるいは二つのアフリカの境界にあるサーヘル諸国(広義のスーダン地方)の存在が一層軽視できなくなってきたといってもよいだろう。しかしアラビア語の普及範囲はイスラム化の範囲よりも狭く、言語のうえでもう一つのアフリカといえるのは、東アフリカのスワヒリ語、西アフリカのハウサ語のような地域共通語の通用範囲と重なっているからである。

2 イスラム化のパターン

トリミンガムは、アフリカにおけるイスラム化のパターンとして、(1)政治支配者の改宗、(2)商人によるイスラム普及、(3)聖戦(ジハード)、(4)スー

フィ教団の活動、などを区別した。西アフリカにおけるイスラム化をめぐる日本でも論争が行なわれたが^{*3}、北アフリカのイスラム化についても、ほぼ同様のパターンを区別することができる。さらに北アフリカでは下記のような特徴が認められる。すなわち、(1)イスラム化の時期が7世紀に溯ること、(2)ムスリムの比率の高さからみてイスラム化が一層深く進行していること、(3)イスラムを正統性の基礎とする国家体制が早くから成立し存続したこと(公法の領域でのイスラム化の進展)、(4)婚姻・相続などについてイスラム法が順守されていること(私法の領域でのイスラム化の進展)、(5)イスラムの祭日、礼拝・巡礼のような宗教儀礼がひろく実行されていること、など。

これを西アフリカのイスラムと比べると、量的という以上に、質的というべき相違があるが、アラビア半島や西アジアに比べると、北アフリカには、西アフリカと共通した特徴も見い出される。すなわち、(1)聖人崇拜(ムラービト崇拜)のような土着信仰と結びついていること、(2)スーフィ教団の活動が盛んで、とくに大衆レベルのイスラム化がザーウィヤ、タリーカなどと呼ばれる祕儀組織を通じて進行したこと、などである。

このようなイスラム化のあり方からみると、モーリタニアはまさに北アフリカと西アフリカの中間的な位置を占めている。イスラム化の歴史は9世紀にさかのぼるが、本格的に進行したのはモロッコのムラービト朝の時代(11世紀)に入ってからであった。ただし正統性の基礎をイスラムに置く、安定した自立政権は成立しなかったから、イスラム法の浸透は公法・私法の領域ともに深くなかった。聖人崇拜、商業活動、聖戦との関連については西アフリカとより大きな共通性がある。

さらにイスラム化に関しては、独立後の再イスラム化にも注意をむけるべきである。くわしくは

述べないが植民地時代にイスラムの領域が狭められたのと対照的に、独立後は憲法でイスラムを国家の宗教と規定したり、またムスリムとしての義務を果たしやすいように、国費でモスクを建設したり、巡礼用の外貨割り当てをしたりした。これを上からの再イスラム化というが、モーリタニアはこの点ではスーダンなどと共通している。しかし街頭や市場の様子を見て感心したのは、アルジェリアなどにくらべて女性たちが実に自由に振るまっていることである。イスラムが社会生活を規制している程度が少ないというよりも、社会の現実に合わせてイスラムが選択的に受け入れられているといったほうがよいだろう。ちなみに複婚はチュニジアを除くマグレブ諸国では合法的に認められているが、現実には少なく、ブラック・アフリカのほうがはるかに多い。

*3 嶋田義仁「西アフリカのイスラム化と交易」
(『アフリカ研究』38号 1991年)。

3 紛争とイスラム

サーヘル諸国は、アフリカ大陸のなかでもとくに紛争の多発地域であるとされているが、多様なエスニック集団(部族・民族)の共存とそれにもとづく対立という要因によってその原因を説明することがあまりに多すぎるのではなかろうか。筆者はそれに対して、植民地遺制と独立後の政治体制の欠陥という要因に注意を向けるべきであると主張した^{*4}。地域の実情(たとえば住民の分布)を無視して、宗主国側の利害関係にもとづいて国境線を画定したり、強権的な政府が地域間の格差や差異を無視して、国民統合の強化という名目で、特定の言語や宗教を押しつけたり対外紛争を引きおこした場合にのみ、紛争が発生し長引くのである。エスニック対立という現象だけに注目していると、



セネガル・モーリタニア国境を流れるセネガル川

紛争解決の展望は永久に見えてこないはずである。上に述べた再イスラム化政策なども同じ背景のなかで理解すべきであり、宗教運動としてのイスラム化とは区別して考えなければならない。

モーリタニアは、その点でも好個な事例である。民族運動の指導者として1960年に独立してから政権の座に就いたワルド・ダグダーは、イスラム教団の長の家系に属するという伝統的権威を背景にするとともに、アルジェリアやギニアのモデルにしたがった単一政党制を導入して、20年近く独裁的な権力の座にあった。モロッコがモーリタニアへの領有権を主張していた時期には、それに対抗するためにアフリカ統一機構のなかの穏健派諸国（とくに南隣のセネガル）に接近していたが、その脅威が薄れるとアラブ連盟に加盟したり（73年）、マグレブ連合の前身（マグレブ常設諮問委員会）への加盟を申請した（75年）。アラブ・アフリカとブラック・アフリカとのかけ橋政策を提唱する傍らで、スペインが撤退した西サハラをモロッコと協調して分割領有したことが、ワルド・ダグダー政権の没落を早めた。その直接の契機は軍事的な敗北と経済危機であったが、西サハラ領を維持するために国

内にモロッコ軍の駐留を認めざるをえず、それが南部の黒人系住民の反発とともにセネガルとの緊張を招いたことに注目しておきたい。

クーデタによって成立した軍事政権はしばらく安定しなかったが、1984年に権力を掌握したタヤ政権が現在にいたるまで継続している。モール系住民と黒人系住民の対立から、しばしば社会不安が生じたが、とりわけ重要な事件は89年4～5月に発生したセネガルとの紛争である。紛争の発端はセネガル川流域に住む農耕民と遊牧民の争いであったが、それが国境地帯での軍事衝突を経て、8月には国交断絶という事態に発展した。もともとセネガル領内には20万人にのぼるモーリタニア人が、首都ダカールを中心に商人・職人として住み着き、また地方で牧畜に従事していた。それに対してセネガル人も、都市の雑業や農村での労働者、漁民として約10万人がモーリタニア領内に定住していた。国境地帯での衝突を契機に両国のマスコミが排外意識を煽り立て、両国で連鎖反応的に人身暴行や商店略奪が行なわれ、パニック状態のなかで双方から大量の難民が発生した。紛争の過程は十分に解明されていないが、人種対立やイ

スラムが真の動機であったというよりは両国の社会情勢や政治体制の行き詰まりがもたらした出来事であったとすべきだろう。

今年(1992年)4月に両国は国交を回復し、5月に国境が再開された。象徴的なのは、それがモーリタニアにおける民主化過程と並行していたことである。民主化とイスラムがどのように関連しているか、簡単に述べておきたい。

*4 宮治「アフロ・アラブ関係……」。

4 民主化とイスラム

民主化の過程は、アラブ・アフリカでもブラック・アフリカと同様に進みはじめたが、イスラムは民主化の障害になるのだろうか。モーリタニアの政治体制でもイスラムは大きな地位を占めているが、軍事政権はイスラム教団を背景にした地方の名望家層との衝突を避けるかわら、政権維持の手段としてイスラムを利用することにはさほど熱心ではなかった。砂だらけの首都の建築物のなかでとりわけ立派なのは、サウジ資金によって建設された大モスクやモロッコ王が寄付したモスクであるが、それらは政権がイスラム化を重視している証拠というよりも、アラブ外交の成果の象徴であるとみなした方がよさそうである。主たる反政府勢力が南部の黒人系住民である限り、軍事政権にとって下からのイスラム化は大きな脅威ではなかった。

モーリタニアでも民主化の過程は、経済危機と世界銀行・IMF主導下の構造調整の進展という条件のもとで推進された。この点からみると、アラブ・アフリカ諸国、ブラック・アフリカ諸国ともに共通の条件下で同様の過程が進行している。モーリタニア政府が構造調整計画を開始したのは1985

年であるが、民主化はそれよりも遅れて87年に地方選挙のレベルで開始され、91年の国民投票によって複数政党制にもとづく憲法が採択された。認可を受けた政党は15に上るが、92年1月に実施された大統領選挙ではタヤ大統領が他の3人の候補を抑えて圧勝した。しかし投票率は46%とさほど盛り上がりなかった。さらに3月に国会選挙が行なわれ、同大統領が率いる与党が79議席のうち67議席を占めることになったが、投票率は平均36%強で、大統領選挙を大幅に下回った。野党が選挙をボイコットした結果であり、選挙によってタヤ政権の安定性が確保されたとはいえない。

民主化過程に影響を及ぼした他の要因として、人権抑圧に対する欧米諸国の非難とともに、タヤ政権が湾岸戦争においてイラク支援の立場を取り、それがサウジアラビアからの資金援助打ち切りをもたらしたという事情も与かっている。この点でも他のマグレブ諸国と同様に、国際関係の要因が大きく関連しているのであり、二つのアフリカの差異はこの点から見ても狭まっているといったほうがよさそうである。

〔参考文献〕

- (1) 宮治一雄『アフリカ現代史——北アフリカ——』山川出版社 1989年(2刷)。
- (2) D. G. Lavroff(ed.), *Introduction à la Mauritanie*, Paris, 1979.
- (3) C. Belvaude, *La Mauritanie*, Paris, 1989.
- (4) G. Nicolas, *Dynamique de l'Islam au Sud du Sahara*, Paris, 1987.
- (5) J. S. Trimingham, *The Influence of Islam upon Africa*, London, 1968.

(みやじ・かずお/広報部)